OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朝鮮通信使の日本漢詩批評 : 『梅所詩稿』の申維翰序文をめぐって
Author(s)	康, 盛国
Citation	語文. 2012, 99, p. 16-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70893
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

朝鮮通信使の日本漢詩批評

――『梅所詩稿』の申維翰序文をめぐって――

康　盛国

一　はじめに

唐金梅所（一六七五～一七三八。以下、梅所と略す。）は、泉州の大商人ながら、漢詩人として、伊藤東涯・新井白石・雨森芳洲などの日本の文人たちや正徳度・享保度の朝鮮通信使たちと幅広く交流した点で興味深い人物である。梅所に関する先行研究には、冠豊一氏・堀川貴司氏の次の論考がある。

○冠豊一「新井白石と唐金梅所」（『日本歴史』第一六五号、一九六二年）・「続新井白石と唐金梅所」（『同』第一八〇号、一九六三年）

○堀川貴司「唐金梅所と李東郭」（『季刊日本思想史』第四十九号、一九九六年）

冠氏は論文中に、新井白石や伊藤東涯などの梅所への評価を紹介するが[1]、その中に享保四年の朝鮮通信使・申維翰（シン・ユハン）の『海遊録』の記述が挙げられている。冠氏は、申維翰の文章を「雨森東による泉南の文士唐金興隆なるもの奇才大名ありという。かれに托して余の批点を求めて来た。その私艸には、観るべきものが多い。もって錚々佼々のたぐいとする」（「続新井白石と唐金梅所」、傍線康、以下も同様）と要約し、梅所の文才が高かったことの証左としている。堀川氏もまた同じ箇所を引用して、申維翰の『海遊録』中の梅所詩への評価の語を紹介している。しかし、冠・堀川両氏の論文は人的交流に焦点が当てられており、その評価に関する具体的な考察は行っていない。

梅所が申維翰に批評を求めた「私艸」とは『梅所詩稿』（上巻）[2]の草稿で、この詩集の序文として書かれた申維翰の文章が『附韓人文』（版本、享保四年成立）[3]に収録されている。『附韓人文』中の申維翰の序文には、梅所の詩への評価が見られるが、通信使たちがどのような観点から漢詩を評価するのか、その基準を表すものとして、また、通信使来日時に行われた漢詩唱和の内実を示す一例として、分析する価値がある。

二　梅所詩に対する申維翰の評価

二・一　申維翰の「書唐金氏詩巻」（『附韓人文』）

『附韓人文』に収録された申維翰の序文には、申維翰が、梅所の詩集に接する、より詳しい経緯が記録されている。次は、申維翰の序文「唐金氏詩巻に書す」の前半部である。

壬辰春、平泉趙侍郎、自夫桑竣使歸、以白石詩草一編行于世。不佞嘗從藝圃得而誦之。謂是婉朗團圓、已露唐人面目。而格韻之道者、時髣髴濟南家。（中略）己亥秋、余遂應佐介之命隨節而東。及到馬州、與雨森氏伯陽傾蓋而談風騷。伯陽於白石素有管邴之驩、語娓々不置。且曰、「夫公病謝事家居、君今至東都、恨亡以相見」。余既悵然改色曰、「譬之三神山近輒風引去、奈吾緣薄何」。伯陽曰、「君之慕白石深矣。白石之所稱有奇士唐金生、治文章、好哦詩。今取其一巻草來、可以侑君笑未。」

（壬辰の春、平泉趙侍郎、夫桑より使を竣へて帰るに、『白石詩草』一編を以て世に行ふ。不佞嘗て芸圃より得て之を誦す。是れを謂ふに婉朗団円にして、已に唐人の面目を露す。而して格韻の道は、時として済南家に髣髴たり。（中略）己亥の秋、余遂に佐介の命に応じて節に随ひて東す。馬州に到るに及びて、雨森氏伯陽と蓋を傾けて風騒を談ず。伯陽、白石に於いて素より管邴の驩有りて、語娓々として置かず。且つ曰く、「夫公病みて事を謝して家居し、君今東都に至るも、恨むらくは以て相見ること亡からん」と。余既に悵然として改色して曰く、「之を譬ふるに三神山近づきて輒ち風引き去るがごとく、吾が縁薄きことを奈何せん」と。伯陽曰く、「君の白石を慕ふこと深きなり。白石が称する所、奇士唐金生ありて、文章を治め、好く詩を哦す。今其の一巻の草を取り来りて、以て君が笑に侑むべきや未や。」と。）

（「書唐金氏詩巻」『附韓人文』二十二丁表）

申維翰は、来日前から『白石詩草』を通して新井白石の詩に接しており、その優れた詩才に感服して「唐人の面目を露す」「時として済南家に髣髴たり」などと評価した。「済南家」とは中国明代の文人・李攀龍の出身地歴城が済南にあったことから、李攀龍を指す。申維翰が李攀龍の名をもって白石を評価することに関しては後に詳述する。

申維翰は、その白石との対面を切に望んでいたが、白石が隠居しているため会えないということを知って残念がる。そこで、芳洲から「白石が称する所の奇士」として梅所を紹介されている。ところで、『附韓人文』（版本）所収のこの序文は、同じく芳洲文庫所蔵の『唐金氏宛申維翰詩文』（写本）にも存し、版本における「白石之所稱有奇士唐金生」のところが、写本においては「白石之門有奇士唐金生」となっている[4]。写本に「門」とあることから、すなわち芳洲が梅所を白石の門下生として紹介したとは確定しがたいが、序文の後半部の内容を考慮すると、申維翰が梅所を「詩風において白石から大きく影響された人」として理解していたこ

とは間違いない。つぎは前の引用文のつづきで、梅所の詩集に対する感想や評価を述べる内容である（囲みは康、以下同様）。

余驚謝、輒出而陳之、得近體若干、就其精華爽籟、徃々有奇思。即如「浄界隔雲金刹冷、高林礙日石樓寒。」「寒汀獨坐蘆花暮、明月相思桂樹秋。」「敗荷聲亂雨過渚、叢桂香濃風滿樓。」「間花墜地恨春鳥、澹月帶寒聽曉雞。」等語、①出其上駟、以當古作者、可作長慶已下諸君子風調。種々神趣、色々天香、鋪則煙霞、秀則琅玕。藉令凌雲臺材木、或時有軽重之偏者、要之不失爲千金構也。②吾於是益信、唐金氏之瓣香、果在於白石。而敢問、③秦青之曲、尚有餘憾也否耶。昔李獻吉爲詞林千古倡亡何而七子作矣。説者謂、陽阿之瑟、北地更張之、歴下鼓之、琅邪玉振之。更爲我謝白石公。（下略）

（余、驚謝し、輒ち出でて而して之を陳し、近体若干（康注：『梅所詩稿』巻上）を得るに、就ち其れ精華爽籟、往々にして奇思有り。即ち「浄界雲を隔てて金刹冷え、高林日を礙りて石楼寒し。」「寒汀独坐す蘆花の暮、明月相思ふ桂樹の秋。」「敗荷声乱れて雨渚を過ぎ、叢桂香濃くして風楼に満つ。」「間花地に墜ちて春鳥を恨み、澹月寒を帯びて暁雞を聴く。」等の語の如きは、①其の上駟を出して以て古の作者に当り、長慶已下諸君子の風調を作すべし。種々の神趣、色々の天香、鋪くして則ち煙霞、秀にして則ち琅玕。藉令凌雲台材木、或いは時に軽重の偏有るも、之を要するに千金の構を為すを失せざるなり。②吾、是に於いて益す唐金氏の弁香、果して白石に在るを信ず。而して敢へて問ふ、③秦青の曲、尚ほ餘憾有るや否や。昔、李獻吉、詞林の千古の倡を為し、何くも亡くして而して七子作るなり。説く者謂ふ、陽阿の瑟、北地之を更に張り、歴下之を鼓し、琅邪玉もて之を振るふ。更に我が為に白石公に謝す。〈下略〉）

（「書唐金氏詩巻」『附韓人文』二十三丁表）

傍線部①の「出其上駟以當…」は、馬を競走させる際、自分の持っている上等の馬を出して勝負することで、明・王世貞の『弇州山人続稿』に、「而此出其上駟以當黄公之下駟」（巻五十八「開先寺寶墨亭記」）という用例がある。つまり、「唐金梅所の詩は、上等の馬を出して昔の作者に対抗するようなものだ」という意である。これは、梅所の詩が「古の作者」の詩を意識して作られたものと判断しての評価と考えられる。

傍線部②の「弁香」とは、ひとかけらのお香の意。「弁香在～（人名）」の形で、その人の詩文に影響を与えた人を示す。明・王世貞の『弇州山人続稿』には、「今讀足下集、序則賢金玉皆其門人也、而瓣香乃在子威（今足下〈康注：王小卿のこと〉の集を読むに、序則ち賢金玉皆な其の門人なりて、而して弁香乃ち子威に在り」（巻二百七「答王少卿」）とある。申維翰は、梅所の詩文が白石の影響を受けていると判断しているのだ。

白石の詩を高く評価した申維翰は、梅所の詩集からも白石の影響が感じられるとしているが、白石と梅所の漢詩において共通する要素は何だろうか。カギになるのは、評価の言葉に表れる、中

国明代の詩人たちの名前である。

傍線部③の「李獻吉」とは、中国明代の詩人李夢陽（一四七二～一五九二）のことで、彼は「文は秦漢、詩は盛唐」と唱え、文学の制作において必ず古典を典型とすべきことを主張する古文辞運動[5]の提唱者である。「七子」とは、古文辞派を代表する前七子あるいは後七子。「北地」はまた李夢陽、「歴下」は古文辞派の後七子と呼ばれた李攀龍[6]（一五一四～一五七〇）、「琅邪」は李攀龍とともに古文辞派後七子の中心人物として知られた王世貞[7]（一五二六～一五九〇）のことである。つまり傍線部③は、古の優れた詩風が、復古主義を唱えた明の李夢陽や李攀龍などの詩人に受け継がれ、さらに日本の白石がそれを継承しているという意味になる。

傍線部①の「其の上駟を出して以て古の作者に当り」及び白石詩を評価する部分の「唐人の面目を露す」も、李夢陽・李攀龍らの復古主義、つまり詩において盛唐の詩を典拠とする主張と連関性がある言葉と考えられる。

ところで、申維翰が白石・梅所を評するなかで、李夢陽・李攀龍などいわば古文辞派の詩人の名前をあげることは、申維翰自身が、李夢陽・李攀龍たちを肯定的に捉えていたことを表す。つぎに引くのは、申維翰の詩文集『青泉集』の序文で、申維翰の門下生であった李瀰（一七二五～?）が認めた文章の一部である。

翁早悦「山海經」「穆天子傳」。及得「弇山稿」讀之。喟肰有並驅之意。詩亦以李于鱗爲準。尤力於「楚辭」。讀之千萬遍。（翁〈康注：申維翰〉早くして「山海経」「穆天子伝」を悦び、「弇山稿」を得るに及びて之を読み、喟然として並駆の意有り。詩は亦た李于鱗を以て準と為し、尤も「楚辞」に於いて力めて、之を読むこと千万遍。）

申維翰が詩において李攀龍を模範としていたと、弟子であった李瀰は述べる。これは、申維翰が読んだという「弇山稿」の影響だろうか。「弇山稿」とは、李攀龍とともに古文辞派後七子と呼ばれた王世貞の「弇州山人四部稿」もしくは「弇州山人続稿」のこと。申維翰が同書の影響を強くうけていることは、さきにみた「上駟を出して以て古の作者に当り」や「唐金氏の弁香、果して白石に在り」など、『弇州山人続稿』にみられる表現が申維翰の文章に使われることからも窺える。

二・二 『梅所詩稿』の考察

それでは、梅所の実作において、申維翰が李夢陽・李攀龍の影響と捉えた要素は何であっただろうか。

申維翰が見た梅所の詩集は、『梅所詩稿』（享保五年序）という題で刊行されるが、この本には江戸中期の僧侶で漢詩人の大潮（一六七八～一七六八）の批点が載る。大潮の批点には、所々、申維翰の評語が引用される。おそらく大潮は、申維翰の批点が打ってある草稿本を参照しながら、自身の批点作業に臨んだと推測されるが、つぎは、その一例である。

○哭篤所北君　　篤所北君を哭す

文星一夕黯無光　　文星　一夕　黯として光無く
夢繞青山恨更長　　夢青山を繞りて恨み更に長し
泗水源流空絶響　　泗水の源流　空しく響を絶ち
茂陵遺草已餘芳　　茂陵の遺草　已に芳を余す
金莖夜滴霄間露　　金莖　夜に滴る　霄間の露
寶劍秋懸隴上霜　　宝剣　秋に懸る　隴上の霜
蕭瑟悲風千里外　　蕭瑟たる悲風　千里の外
海天月落樹蒼々　　海天月落て樹蒼々
上皇聞先生之名屢有天賜第五句故云

（『梅所詩稿』巻上　七丁裏）

右の詩は、北村篤所（一六四七～一七一八）の死を哀悼する作品で、篤所が亡くなった享保三年七月以後の作であろうが、この詩の頸聯（第五・六句）の右には大潮が申維翰の評価を引用した文章が載る。

申維翰云、「此頸聯的是于鱗語」。韓人有眼。（申維翰云はく、「此の頸聯的に是れ于鱗の語なり」と。韓人眼有り。）

申維翰は、頸聯はまさに于鱗の語と述べ李攀龍の影響を示唆しており、これを引用した大潮自身もその評価を首肯している。

頸聯のうち、第五句は、漢の武帝が承露盤を作って露を集め、自らの仙薬をつくるための材料としたという故事を踏まえる（『後漢書』）。「金茎」は、この承露盤を支える銅柱である。また、第六句は、晋の武将陳安が、隴上（西方の辺境地帯、現在の甘粛省）において劉曜と闘った際、左手に七尺の大刀、右手に丈八の蛇矛を持ち、壮士数十名とともに奮戦した故事を踏まえる[8]。すなわち、この詩の第五句目では「夜にそびえ立つ金茎より天上の露が滴る」と述べ、高雅な雰囲気を醸し出している。また、第六句目では、「秋になると早くも壮士の宝剣に霜がかかっている」と詠い、壮士の勇壮な様子を、西方の辺境地帯の自然と関わらせながら、スケールの大きな描写をしようとしている。

こういった、高雅、雄大な表現を重んじる詩のあり方は、李攀龍ら古文辞派の詩人たちが模範とした盛唐詩の一特徴であり、その点において申維翰は、梅所の詩が李攀龍たちの影響を受けていると判断したのだろう。

なお、この「金茎」の語に関しては、「上皇、先生の名を聞きて、屢ば天賜有り。第五句故に云ふ」と自注が付されている。つまり、北村篤所が上皇から天賜をいただいていたことを「金茎」の故事で表現しているのである。「金茎」の語は杜甫の「秋興」にも見えるが、ここにおける用法は、中国晩唐の詩人李商隠の「漢宮詞」に想を得たものであろう[9]。

青雀西飛竟未廻　　青雀西に飛んで竟に未だ廻らず
君王長在集靈臺　　君王は長に集霊台に在り
侍臣最有相如渴　　侍臣　最も相如の渇有れども
不賜金莖露一杯　　賜わらず　金茎の露一杯

（『唐詩選国字解』〈安永九年刊〉）

この詩は、漢の武帝が自分の不老長生の術を求めながら、臣下の司馬相如の「消渇の病」のためには金茎の露一杯も賜わないこと

を詠って、作者の時代の天子・唐の武宗を暗に批判した詩である。この「金茎」という言葉の使用からも、明代古文辞派の詩風が想起されたのではないだろうか。李攀龍の詩文集である『滄溟集』には「金茎」が含まれた詩が十二首にものぼる[10]。それほど、李攀龍は「金茎」という語を、好んで自身の詩に用いていた。

このほかにも、申維翰は、梅所に宛てた序文の中で具体的な詩句に言及しながら梅所の詩を評価しているが、彼が挙げた詩句からも唐詩より題材や表現を取り入れた例が見出せる。つぎの詩は、申維翰が、評語の中で挙げた梅所の詩句「浄界隔雲金刹冷」の全文である。

○奉和白石先生卜居　白石先生の卜居に和し奉る

城東新築及秋殘　城東の新築　秋残に及び
落慶遙思幷二難　落慶遥かに思ふ　二難(11)を并(12)することを
浄界隔雲金刹冷　浄界　雲を隔て　金刹冷やかなり
高林礙日石樓寒　高林　日を礙りて石楼寒し
青山白髪鏡中影　青山　白髪　鏡中の影
黄橘丹楓畫裏看　黄橘丹楓　画裏に看る
勝地幽棲知不惡　勝地幽棲　悪からざることを知る
清泉分洌足芳蘭　清泉　洌を分ちて芳蘭足る

（『梅所詩稿』巻上　十二丁裏）

右の詩は、白石の「卜居」という詩に和韻したもの。第一・第二句から、季節は晩秋で、新築を祝う内容であることがわかる。申維翰が引用した第三・第四句は、「雲の彼方にあり、生い茂った高木が日をさえぎって寒気さえ感じられる、寺院と石楼」を描写しているが、杜甫の「堂成る」に類似する表現がみえる。

杜甫〈堂成〉

背郭堂成蔭白茅　背郭　堂成りて白茅蔭はる
緣江路熟俯青郊　縁江　路熟して青郊に俯す
檀林礙日吟風葉　檀林　日を礙りて風に吟じる葉
籠竹和煙滴露梢　籠竹　煙に和し露を滴らす梢
暫止飛烏將數子　暫く止まる飛烏は数子を将ゐ
頻來語燕定新巢　頻りに来る語燕は新巣を定む
旁人錯比揚雄宅　旁人錯って比す　揚雄が宅
懶惰無心作解嘲　懶惰にして解嘲を作るに心無し

（『杜詩註解』〈和刻本、元禄六年刊〉巻二　六丁裏）[13]

右の詩は、堂ができあがったことを詠じた作で、第三句は「生い茂ったはんの木が日光をさえぎっているなか、風にゆれる葉っぱの音が涼しげに聞える」という情景を詠っている。梅所詩も、杜甫詩も「新築」をモチーフにしている点、「木々に日光がさえぎられている涼しげな情景」が描かれる点などで一致している。

つぎの詩は、申維翰が挙げた梅所の詩句「敗荷聲亂雨過渚」の全文であるが、この詩からは、中国晩唐の詩人許渾の詩句と一致する語句がみえる。

○予前奉和白石先生依都蠡湖詞兄韻之作餘興未盡再成呈先生兼寄湖詞兄（予前に、白石先生の都蠡湖詞兄の韻に依るの作に和し奉るも、余興未だ尽きず。再び成して先生に呈し、

兼て湖詞兄に寄す。）

佳人高臥石林秋　佳人高く臥す　石林の秋
騒客空陪月夕愁　騒客空しく陪す　月夕の愁を
渓水武陵還可釣　渓水武陵　還た釣るべし
煙波彭蠡已同舟　煙波彭蠡(14)　已に舟を同くす
敗荷聲亂雨過渚　敗荷声乱れて　雨渚を過ぐ
叢桂香濃風滿樓　叢桂香濃くして　風楼に満つ
獨坐遥思今夜興　独坐　遥かに思ふ今夜の興
一時唱和薄元劉　一時の唱和　元劉(15)に薄るを

（『梅所詩稿』巻上　十丁表）

「敗荷」は、秋になって破れた蓮の葉の意。「雨が降っている秋の夜、池に浮いている蓮の葉より雨音がきこえており、そばに生い茂っている桂の木々より風がふいてきて、その香りが楼閣をみたす」という情景を詠んでいる。晩唐の詩人、許渾の詩に類似する表現がみえる。

許渾〈咸陽城東楼〉

一上高城萬里愁　一たび高城に上りて万里愁ふ
蒹葭楊柳似汀洲　蒹葭(16)楊柳　汀洲の似し
渓雲初起日沈閣　渓雲初めて起りて日閣に沈み
山雨欲來風滿樓　山雨来らんと欲して風楼に満つ
鳥下綠蕪秦苑夕　鳥緑蕪に下る　秦苑の夕
蟬鳴黄葉漢宮秋　蟬黄葉に鳴く　漢宮の秋
行人莫問當年事　行人問ふ莫れ　当年の事を
故國東來渭水流　故国東来　渭水流る(17)

（『三体詩法』〈和刻本、明暦三年刊〉第三巻七丁裏）(18)

第四句は、今にも雨が降りそうな曇りのなかで風が吹いているさまを「風楼に満つ」と表現しており、梅所詩の第六句と類似している。

以上でみたように、梅所詩に唐詩と類似する表現が含まれていることも、申維翰に李夢陽・李攀龍らの明代の詩人の影響を感じさせる一因になったと考えられる。

二・三　梅所の詩観における何景明の影響

ところで、梅所は実際にどのような詩観をもっていただろうか。申維翰は梅所の詩集をみただけで、実際の対面は成し遂げていない。はたして、申維翰が評価したように、梅所は、李夢陽・李攀龍らの詩人の影響を受けていただろうか。これに参考になるのが、『梅所詩稿』の大潮の序文である。

泉南唐金氏好里居。嘗通仕籍無所事々矣。又善病々輒不出應客。凡其所爲詩、刻意古範、鋳形宿模。而獨於四方諸名家者、則日益事交相酬往不休、然世之推竊求售、乃唐金氏弗屑焉。謂余曰佛有筏喩言達岸則捨筏矣。興隆則際吾才之界汲汲然欲以達岸捨其津筏。意與象應、華與實稱、持此傳海内之同調者有一不唐而無再不唐乃足耳。（後略）

（泉南の唐金氏、里居を好む。嘗て仕籍を通して事を事とする所無し。又た善く病む。病めば輒ち出でて客に応ぜず。凡

そ其の為る所の詩、意を古範に刻み、形を宿模に鋳る。而して独り四方諸名家なる者に於いて、則ち日び益事として交はり相ひ酬往して休まず、然るに世の推窮して售はるることを求むるも、乃ち唐金氏、屑しとせざるなり。余に謂ひて曰く、「仏に筏の喩へ有り。岸に達すれば則ち筏を捨つるなりと言ふ。」と。興隆（康注：梅所のこと）、則ち吾が才の界を際めて汲汲然として以て岸に達し其の津筏を捨てんと欲す。意は象と応じ、華は実と称ひ、此を持して海内の同調なる者に伝へ、一の唐ならざる有るも再び唐ならざる無くんば乃ち足るのみ。（後略）

（『梅所詩稿』大潮序）

大潮は、梅所の詩を「凡そ其の為る所の詩、意を古範に刻み、形を宿模に鋳る」と評価している。これは、詩の内容や形式において古の詩を模範としていることを表現したものだが、李夢陽とともに中国古文辞派の前七子と呼ばれた何景明の文集に同じ語句が見だせる。

空同子、刻意古範、鑄形宿鏌、而獨守尺寸。（空同子、意を古範に刻みて、形を宿鏌に鋳て独り尺寸を守る。）

（「與李空同論詩書」『大復集』[19]）

空同とは李夢陽の号である。何景明が李夢陽の詩作方法について述べたこの箇所は、盛唐の詩を模範とする、李夢陽の主張を端的に表している。ところで、また何景明は同文の後半部で、優れた古詩をただ模倣することに止まる当時の作詩の傾向を批判的に述べている。

今爲詩不推類極變、開其未發、泯其擬議之迹、以成神聖之功、徒叙其已陳、修飾成文、稍離舊本、便自杌捏、如小兒倚物能行、獨趨顛仆。雖由此即曹劉、即阮陸、即李杜、且何以益於道化也。佛有筏喩。言舍筏則達岸矣、達岸則舍筏矣。

（今、詩を為るものは類を推して変を極めず、其の未発を開き、其の擬議の迹を泯し、以て神聖の功と成し、徒に其の已に陳ぶるを叙し、修飾して文を成し、稍旧本を離るれば、便ち自から杌隉たりて、小児の物に倚らば能く行ふも、独り趨らば顛仆するが如し。此に由りて曹劉に即き、阮陸に即き、李杜に即くといえども、且に何を以てか道化に於いて益あらんや。仏に筏の喩有り。筏を舍つれば則ち岸に達し、岸に達すれば則ち筏を舍つると言うなり。）

（「與李空同論詩書」『大復集』）

何景明は、「このごろの詩人は類推して変を極めない…ただ已に述べられた旧作にやや修飾を加えて文を成し、すこしでもその作品から離れれば不安になって、まるで幼い子供が物に依らずに走るとすぐ転んでしまうことのようだ」と述べた。傍線部の筏の喩は、湖を渡るために使った筏がいくら役に立ったといっても筏を捨てずにそれを背負って道を進めるのはおかしいように、目的を果たすために有効に使った方法でもその目的を果たした後は果敢に捨てて次の段階に臨むべきことを教える喩である。つまり、古の優れた詩を模範にすることを方法として肯定しながらも、それに止まってしまうことを警戒するのである。

ところでこの筏の喩は、『梅所詩稿』の大潮の序にも「余に謂ひて曰く、『仏に、筏の喩へ有り。岸に達すれば則ち筏を捨つるなりと言う。』」と出ており、大潮が梅所から聞いた言葉として引用されていた。大潮自身が何景明の文章を読んでいることは、「刻意古範、鑄形宿鏌」の表現から類推できるが、筏の喩に及んで梅所もやはり何景明の文章を読んでいたと推定されるのである。もちろん、筏の喩はその元の典拠を仏書にたどることができるが、詩論を説く際に用いている点において何景明の文章を参照した蓋然性は高いと言える。

李夢陽とともに古文辞派の前七子と呼ばれた何景明の詩観は、李夢陽のそれと一致するものではないが[20]、古の詩を模範とすることを有効な方法と捉える点において同じ方向性をもっていた。梅所の詩作から、唐詩への志向性を感じ取った申維翰は、それが中国明代の李夢陽・李攀龍らの詩の流れを汲むものとして評価したが、李夢陽とともに古文辞派前七子と呼ばれた何景明の文章を梅所が参照したことから、確かに明代の復古主義者たちの影響を彼が受けたことが確認されるのである。

三　まとめ

以上、享保四年の朝鮮通信使・申維翰が、唐金梅所の詩を評価した内容を、梅所の実作とともに考察した。考察の結果、梅所の詩が、唐詩の詩風や題材を自作に取り入れている点や、梅所のそのような詩を、申維翰が肯定的に捉えて中国明代の李夢陽・李攀龍ら、いわば古文辞派詩人たちの系譜の中で位置づけている点、また、そのことに申維翰自身が李攀龍の詩を模範としていることや梅所が何景明の文章を参照していたことが関係する点などを確認した。

享保四年は、日本における古文辞学の先駆者と知られる荻生徂徠が、李攀龍・王世貞の著作を入手してから十四年目になる年であり[21]、朝鮮で「古文辞を創導した」と言われた尹根壽（ユン・グンス）が李夢陽の詩選集『崆峒詩（コウドウシ）』を刊行してから百三十九年が経った年である[22]。朝鮮と日本は、中国の漢詩壇の影響をうけるという点で同様だが、地理的・文化的な違いから、受け入れる時期や様相が変わってくる。朝鮮通信使の来日時になされる、日朝の文人たちの漢詩交流は、その違いが克明にみえる機会になるのではないだろうか。今回の調査では、日朝間の詩壇の比較にまではいたっていないが、さらなる調査を通して両詩壇の違いや中国の詩壇の影響を受ける上での違いを明らかにしていきたい。

注

（1）冠氏は白石の梅所評価に関して、白石が『停雲集』の後編に梅所の詩を収録しようとしていたことを論証する。

（2）大阪府立中之島図書館蔵本がある。刊本、二巻二冊、半紙本、享保五年序。

（3）芳洲文庫本がある。刊本、半紙本、『廣隆問槎録』と合綴されている。『附韓人文』は、享保度の朝鮮通信使が唐金梅所へ送った詩文を収録している。中には、申維翰の「書唐金氏詩巻」

（二十二丁表）や姜栢の「唐金詩集序」（二十四丁表）も収録するが、両文ともに、『梅所詩稿』上巻の梅所の詩句を一部引用している。よって、同文は、『梅所詩稿』上巻の序文として書かれたものであることが分かる。また、堀川氏は『附韓人文』を、『梅所詩稿』上下巻の附録として刊行されたものと推定している（「唐金梅所と李東郭」）。

（4）この箇所以外の主要な違いとしては、版本（『附韓人文』）において梅所の詩句が四例引用されるのに対し、写本（『唐金氏宛申維翰詩文』）では五例引用される点が挙げられる。写本に載る五例の詩句は、版本に載る四例の詩句を包含しており、その点において、写本が版本より原文に近いと推定される。

（5）吉川幸次郎氏は、『元明詩概説』（岩波文庫、二〇〇六年）の中で、古文辞運動を次のように定義する。「古代的な強烈な文学の再現を目標とし、文学の製作は必ず古典を典型とすべきこと、典型と古典は最も中心的なものに限らるべきこと、具体的には、散文は「史記」を中心とする西紀前「秦漢」の文章、詩は杜甫を中心とする八世紀「盛唐」の詩、あるいは副次的には西紀直後の「漢魏」の詩、それのみを排他的に典型として祖述すべきであり、それ以外の過去の文学は邪道として排撃すべきこと、ことに宋人の詩文は唾棄すべきこと、更にまた制作の方法としては、かく排他的に選ばれた典型と自己との、完全な合致であるべきこと、合致は、用語、措辞ばかりでなく、内容となる感情の形態においてもそうであるべきこと、それらを主張とする。」

（6）「北地」「歴下」に関しては、たとえば、朝鮮の文人の許筠（ホギュン）（一五六九～一六一八）の「明四家詩選序」に、つぎのような用例がある。

明人作詩者。輒曰吾盛唐也。吾李杜也。吾六朝也。吾漢魏也。自相標榜。皆以爲可主文盟。以余觀之。或剽其語。或襲其意。倶不免屋下架屋。而誇以自大。其不幾於夜郎王耶。弘正之間。光嶽氣全。俊民蔚興。時則北地 李夢陽 立幟。信陽 何景明 嗣後。鏗鏘炳烺。殆與李唐之盛。爭其銖累。詎不韙哉。流風相尚。天下靡然。遂有體無完膚之誚。是模擬者之過也。癸病於作者。歴下生 李攀龍 以卓犖踔厲之才。鵲起而振之。吳郡王世貞 遂繼以代興。岳峙中原。傲倪千古。直與漢兩司馬爭衡於百代之下。吁亦异哉。之四鉅公。實天畀之以才。使鳴我明之盛。其所制作。具參造化。足以耀後來而軼前人。夫豈與標榜竊襲者。幷指而枚屈哉。（下略）

（「明四家詩選序」『惺所覆瓿稿』巻之四）※『韓國文集叢刊』第七十四

（7）「琅邪」に関しては、中国明末清初の文人・銭謙益（一五八二～一六六四）の『列朝詩集小伝』に次のような用例がある。

萬曆間、琅琊二美、同仕南都、爲敬美太常官屬。

（「湯遂昌顕祖」『列朝詩集小伝』）※『中国文学参考資料小叢書』二

「二美」とは、王世貞（字・元美）と王世貞の弟である王世懋（字・敬美）との併称である。

（8）陳安の勇敢な戦いぶりは楽府「隴上歌」によって讃えられている。

（9）「金茎」に関しては杜甫の詩句「蓬萊宮闕對南山、承露金莖霄漢間（蓬萊の宮闕南山に対し、承露の金茎霄漢の間）」（「秋興」第五）も当然意識されていると考えられるが、杜甫の詩句における「金茎」は宮殿の神秘的な雰囲気を形象するものとして描かれるだけであり、臣下に与えるという発想には、李商隠の「漢宮詞」の関与が欠かせないと考えられる。

（10）「金茎」が含まれた李攀龍の詩には、「葉舎人」・「東元美」・「元日早朝」・「答宗考功齋居見贈」・「徐子與席懐梁公實」・「郡閣懐王徐二比部」・「苔元美病中見寄幷示吳舎人」・「得元美兄弟書」・「皇太子冊立入賀」・「仲鳴蒲桃」・「少年行」（第二首）などがある。

（11）二難は二つの得難いもの。賢い君主とよい賓客。ここでは「よい主人とよい客」の意か。
（12）金刹は、僧寺（寺）の意。
（13）『和刻本漢詩集成』第二（汲古書院、一九七五年）による。
（14）彭蠡は湖の名。今の江西の鄱陽湖。
（15）元劉は、元稹（七七九～八三一）と劉禹錫（七七二～八四二）。
（16）水草の名。おぎと、あし。
（17）川の名。陝西省を東流し、潼関県で黄河にそそぐ。黄河最大の支流。
（18）早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる。
（19）『影印文淵閣四庫全書』（第一二六七冊）による。
（20）李夢陽と何景明の詩観の違いに関しては、例えば、中村嘉弘氏の「古文辞派と公安派―摸擬と創造」（『中国の文学論』、汲古書院、一九八七）において指摘されている。
（21）『江戸詩歌論』（揖斐高著、汲古書院、一九九八年）十八頁
（22）『崆峒詩』は一五八〇年に刊行された。金愚政氏「宣祖年間の文風の変化と壽序」（『東方漢文学』四十七号、二〇一一年）による。

（かん・そんくっく　本学大学院博士後期課程）